

ごあいさつ

一般社団法人 日本小児はり学会
会長 恵美 公二郎

会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。昨年は、京都であいにくの荒天の中、会員の皆様をはじめ多くの方に学術集会にご参加いただき厚く御礼申し上げます。

さて、本会が設立して7年が経過した今、学術集会等、事業がマンネリ化してきているのではないかという点で自分自身反省すると共に、日本でのこれからの小児はりのあり方に対して少なからず心配しているところです。もちろん、これまでの長い歴史から考えますと、わずか7年ばかりで何を言うのかというお叱りを承知で申し上げますと、まず会員数が伸び悩んでいる事実です。これまでの諸先輩方のご尽力、関西にはまだ小児はりを受け継がれているという事実、新しい書籍の出版、毎年のように大勢の学生が参加する学術集会などどれをとっても飛躍につながっていかねばならないはずですが、また、国際化という点で、日本の小児はり世界的にも注目されつつあります。私自身も一昨年、本会顧問トーマス・ベルニッケ先生が会長に就任されたドイツ国際日本伝統医学協会の記念すべき第一回フランクフルト学術集会に招かれ、講師の一人として貴重な経験をさせて頂きました。そこで感じたことは、運営委員、参加者、企画内容など全てにおいてドイツの医療人はとても積極的である事です。一つの講義が4時間以上にわたる事も然る事ながら、終了後も日本を代表する鍼灸大学教授の形井秀一、山下仁両先生を壇上に上げ、参加者全員からの質疑応答の時間を十分に設けておられ、それに比べると日本での講演は甚だ簡単に思えるくらいでした。

この中身の濃い方法を取り入れようと、トーマス先生の来日に合わせて小児はり学会特別講演会を企画し4月21日に開催しました。その内容は翌日からの患者さんへ「疝のむし」の説明に大いに役立つことができました。それは、赤ちゃんが生まれる時に狭い子宮頸部という産道を通るため頸椎に異常をきたし、特に上位頸椎であり、そのすぐ際を走行している迷走神経、舌咽神経、舌下神経等の脳神経が圧迫されるため、その神経支配領域に様々な不安定症状が出現し、またその部位には自律神経も集中しており、これらの症状がはっきりと表れる学童期までに乳幼児期の「疝のむし」症状を治めることが重要になるのです。会員の先生方には、こういった交流の場により一層積極的にご参加いただき、西洋医学を主体とした国で日本鍼灸を実践する先生方と意見を交わして頂きたいと願います。

また、第5回学術集会に於きまして「北米の小児はり治療」をご紹介下さったニューイングランド鍼灸大学院助教授桑原浩榮先生は、米国では患者にも施術者にも疲労が無く、衛生的で、恐怖が無く、痛みを感じない小児はりで多くの症例に対応しており、先生ご自身の患者データによりますと、注意欠陥多動性障害が一番多く、日本では鍼灸の対応が難しい発達障害症例でありました。

今年9月23日開催の第7回大会は、テーマとして小児の発達障害に対する小児はりでの有効性を実証する足掛りとしていきたいと考えています。日本鍼灸師もこのような貴重な症例報告に習って欧米鍼灸に負けないうよう取り組まれる事を願っています。